

ART KISS LETTER

vol.45

FREE

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

SPRING
[2010.春号]



「知られざる日赤の歴史展」関連イベント、「みつけてみよう元気のしくみ～今日からキミは健康博士～」(2009.12.26)会場でのハービットくんと参加者のみなさん



コレクション展関連イベント「アーティスト・トーク」(2009.12.20)でのゲストやなぎみわさん

「知られざる日赤の歴史展」&「メリー・ゴー・ラウンド」展が始まりました！

本年も、CAMKをどうぞ宜しくお願いいたします。

当館では、昨年12月19日より、「知られざる日赤の歴史展～すべては熊本から始まった～」とコレクション展「メリー・ゴー・ラウンド～煌めきと黄昏」展が同時開幕しました！

「知られざる日赤の歴史展」では、創立120周年を迎える日本赤十字社熊本県支部の歴史を辿るとともに、100周年を迎える日本赤十字社の絵画コレクションよりパブロ・ピカソ、東郷青児、藤田嗣治など56点の絵画をご紹介します。また、4年ぶり3回目となるコレクション展では、「メリー・ゴー・ラウンド」をキーワードに皆様を祝祭の世界へと誘います。安本亀八の《生人形》をはじめ、草間彌生、千住博、やなぎみわ、横尾忠則、中島千波などの多彩な作品をお楽しみください。

12月20日には、「メリー・ゴー・ラウンド」展開催を記念して、出品作家のやなぎみわさんをお招きし、作品制作や、当館前館長の南嘉宏氏が日本館コミッショナーを務めたヴェネツィア・ビエンナーレでの展示、新作について伺いました。お越しいただいた皆様からも多数のご質問やご感想をいただき、充実したトークとなりました。(A.A)

museum
information

熊本県現代 美術館の活動

CAMKEESボランティア秋の研修旅行に行ってきました。

2009.10.20

当館のボランティアチーム CAMKEES のみなさんと秋の研修旅行に行ってきました。目的地は福岡。福岡県立美術館では「大原美術館コレクション展—名画に恋して」と「高島野十郎—至福のであい」の2本の展覧会を鑑賞しました。学芸員の方からの“恋する1枚を見つけてください”というアドバイスに、ドキドキしながら作品との出会いを楽しみました。昼食後は秋晴れの空の下、「第4回福岡アジアトリエンナーレ2009」を見るべく散歩がてら福岡アジア美術館まで歩きました。トリエンナーレでは、最初に学芸員の方に見どころを教えてもらい、普段なじみのないアジアの現代アートも、興味深く鑑賞することができました。お世話になった各館のスタッフのみなさん、ありがとうございました！秋の日はつるべ落とし…無事美術館に着く頃には空は真っ暗になっていましたが、アートと笑顔溢れる楽しい研修旅行となりました。(S.Y)



日本画トーク&ワークショップ ①「日本画のイロハ」

2009.10.25

「九州ゆかりの日本画家たち」展出品作家の山本太郎さんによるトーク&ワークショップ「日本画のイロハ」が開催されました。第一部が、トーク「そもそも日本画ってなに?」。第二部がワークショップ「小下絵大下絵」。トークを聞いたり、実際に制作したりと色々な側面から山本太郎さんによる日本画入門編が楽しめました。

トークでは、普段私たちが「日本画」と呼んでいる言葉が、実は明治時代に、欧米の文化を日本が吸収し近代国家を目指した時に生まれた言葉であるなど、何気なく使う「日本画」という言葉に秘められた背景や歴史をお話してくださいました。(M.O)

続いてワークショップで実践です。油彩や水彩に慣れていない人にはあまり馴染みのない「小下絵」「大下絵」。これらは、素材の修正が難しい日本画の制作では基本となるものだそうです。小下絵で構想を練って、本画と同寸の大下図に引き延ばして構成などを確認。この小下絵を大下絵に写し取るという日本画の制作過程を実際にやってみました。小下絵と大下絵に同数のマス目を引いて拡大するという一見単純な方法ですが、これが意外に厄介だったもよう。いつも絵を描く時と勝手が違って戸惑ったという声も。しかしみなさん熱心に取り組んだ成果、見事に完成。日本画を描くときには、このような過程があるのだなと、参加者みんなが感心。今度、日本画をみるときは、今までと違う視点が見れそうという感想もでました。(M.F)



日本画トーク&ワークショップ ②「ブックカバーをつくろう」

2009.11.1

「九州ゆかりの日本画家たち」展出品作家である日本画家の比佐水音(ひさ・みを)さんを講師にお招きし、日本画ワークショップ「ブックカバーをつくろう」を開催しました。初めに、日本画の世界をより身近に感じてほしいという思いから、墨と筆で模様を描く運筆練習や、顔料をニカワで溶いたり胡粉をすり潰すなどの日本画制作の行程をじっくり体験しました。その後の本番では、朽葉色や草緑色などの色の和紙に、鮮やかな色の絵の具で紅葉や小魚など練習したモチーフを交えながら思い思いの図柄を描き込みました。内容もりだくさんの3時間半、完成したときのみなさんの満足感あふれる笑顔が印象的でした。(S.Y)



第3回&第4回お話し玉手箱LIVE

2009.10.18&12.19

ラジオの朗読番組のライブ版として、RKKアナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんによるお話し玉手箱LIVEが開催されました。第3回は、太宰治「桜桃」、熊本のむかしばなしから「山んぼとショウブ」、石黒之武久「丘の上のちいさなレストラン」の3作品を朗読していただきました。「丘の上のちいさなレストラン」では、藤道明俊さんのピアノ演奏も加わり、約70名の観客を楽しませました。アンケートによると、偶然に立ち寄った方も多く「ちょっとだけ聞くつもりでしたが、緩急をつけたプロの語り口にひきこまれました」と、素敵なひとときとなったようです。第4回は、芥川龍之介の「蜜柑」、宮城野郎の「蜘蛛の糸」、クリスマスに合わせたディケンズの「クリスマス・キャロル」の朗読が行われました。ストーリーは知っていても、その言葉の響きに改めて耳を澄ますと、新鮮な緊張感が広がりました。「クリスマス・キャロル」では、臨場感あふれる声の演技に会場が盛り上がり、約70名の方楽しんで頂きました。(Y.H)



「明後日朝顔ミニリースをつくろう」ワークショップ

2009.11.5

日比野克彦さんによるアートプロジェクト「明後日朝顔」の当館実施3周年記念イベントとして、ワークショップ「明後日朝顔ミニリースをつくろう」をキッズサロンで開催いたしました。夏に、ピンクや青の可愛らしい花を咲かせて美術館を明るく彩ってくれた朝顔のツルをくるくると巻きまして、紙粘土で手作りした朝顔、種などのパーツをボンドでくっつけ、お好みでリボンを飾りました。参加者の皆さまに、とても楽しんでいただけたようです。日比野さんにも、素敵なリースを作っていただきました。(C.T)



第71回&第72回 詩の朗読会

2009.10.22&11.26

第71回として開催された詩の朗読会は、「美しさ」または「えんぴつ」をテーマに、10名の方が詩作を発表しました。うち1人の方が「ネットで紹介をみつけて面白そうだなと思いきや…」と飛び入り参加、詩作を発表されました。「えんぴつ」のテーマについては、「削る」ことや「線」の表情、色の濃淡などが詩作に取り入れられていました。「美しさ」については、海でのデートや神楽などから、その鮮烈さ、はかなさなどの印象が詩作にとりいれられていました。美しさも、えんぴつも、美術館は非常に縁の深い題材でしたので、発表者の感性で紡がれる言葉に、一層興味深く耳を傾ける夕べとなりました。第72回は、「心の絵・心の美」がテーマでした。9名の方が詩作発表、1名の方が今回のテーマにあわせて思うところの報告を行われました。今回の発表では、夏目漱石旧居を訪れて想ったこと、マーク・ロスコの絵画、モイーズ・キスリングの絵画、中学生の時に衝撃を受けた並木道を描いた絵画、空の雲などをテーマにした詩作、また美術作品鑑賞体験そのものの感動を綴った詩作が朗読されました。今回の発表は、自分のこころのなかの作品や美、というテーマだったせいか、より一層個々の生活や日々のこころの動き、というものを意識した作品が多かったのが印象的でした。はじめて詩の朗読鑑賞に参加されるお客様も多く、冬の夜の室内のおだやかで楽しい雰囲気が漂っていました。(H.T)

ミュージック・ウェーブNo.025 虚鐸(きょたく)の演奏会

2009.11.21

「九州ゆかりの日本画家たち」展の会場内にて、虚鐸(きょたく)の演奏会を開催しました。虚鐸とは、熊本出身の西村虚空氏によって作られた縦笛のこと。竹本来の特性を活かした作りで、尺八よりも長く、低音のゆっくりとした瞑想的な音色が特徴です。今回は、展示会の第1部で紹介している亡き5名の日本画家に捧ぐとして、田中一村の作品前で演奏していただきました。シンプルながら、深い、広がりのある音と一村の屏風絵が響き合い、心安らくひとときとなりました。また出品作家でもある大塚浩平さんも出演され、「熊本生まれの虚鐸をもっと知ってもらうために演奏の機会を増やしたい」と語っておられました。みなさんの今後の活躍がとても楽しみです。(M.O)



ミュージック・ウェーブNo.026

福岡アメリカンセンター共催 カミラ・ホイテンガ ソロ・フルートコンサート

2009.12.6

福岡アメリカンセンターとの共催で、アメリカ出身のフルーティスト、カミラ・ホイテンガさんのソロ・フルートのコンサートを開催しました。カミラさんは、世界各地でのコンサートやレジデンス・プログラム等で幅広く活躍するフルーティストです。今回は、バッハなどのクラシックから、尺八を思わせる現代曲まで、さまざまな表現で、フルートの魅力をたくさん伝えてくださいました。またクリスマス・キャロル・ヴァリエーションとして、「ジングル・ベル」そして、「We Wish You a Merry Christmas」を皆と一緒に歌い、クリスマス気分を味わうとても楽しいひとときとなりました。(M.O)



第3回&第4回CAMK「読みがたり」 2009.10.24&12.5

第3回は「ハロウィン」、第4回は「クリスマス」と、季節に応じたテーマで開催しました。読み手のボランティアさんの衣装にご注目！魔女やかぼちゃのおばけ、サンタクロースやお手製のキラキラツリーの飾りをつけたエプロンなど、お話しに合わせたコスチュームでの登場に子どもたちは大喜びでした。お話し以外にも、指人形や手遊び歌、おなじみとなった紙芝居が行われ、笑顔でいっぱい楽しい会となりました。(C.T)



命の花壇が冬の花に植えかえられました。

2009.12.1

熊本県立熊本養護学校農芸班のみなさんが命の花壇の冬の花の植え替えに来てくださいました。今回は、当館の今冬の展示会である「知られざる日赤の歴史展」、「熊本市収蔵作品展 CAMK コレクション vol.3 メリー・ゴー・ラウンド—煌めきと黄昏」展に合わせて、エスカレーターを上ってすぐの通路沿いは白と赤で赤十字カラー、正面の大きい花壇は、黄色、ピンク、紫などの花でメリー・ゴー・ラウンドをイメージして植えられています。植えただけの頃はつぼみだった苗も、徐々にほころび、きれいに咲き揃ってきました。農芸班のみなさん、いつも愛情たっぷりのきれいな花をありがとうございます。(S.Y)



12月6日快晴の寒空の下、KAB 熊本朝日放送との共催により、日比野克彦さん考案のHIBINO CUPを新市街サンフィールドで開催しました。今回のヒビノカップは趣向を少し変え、中心商店街活性につなげるべく商店街対抗！と銘打ち、5商店街（上通、下通、新町、古町、河原町）の代表チームと1市民団体、一般公募3チームを合わせた9チームの対戦となりました。一般チームの中には、日比野さんが鹿児島と福岡で展開したプロジェクトのメンバーと熊本メンバーが混成されたドリームチームもありました。ヒビノカップは、段ボールとエアパッキンでゴールとボールを作成するワークショップを行い、その自作のものでミニサッカーゲームをします。今回のテーマは、ゴールが「城」、ボールが「酒甌」。同じテーマでも、9チーム思い思いのものが出来上がっていました。優勝・準優勝を予想するお楽しみ抽選会「TOTOT(トットト)」も盛況に終わり、65通の応募がありましたが、残念ながら当選者は0人でした。日ごろ、なかなか顔を合わさない各商店街のみなさんが、ヒビノカップを通して交流し、また日ごろ思っていたとしても口に出さない対抗心を8m×8mのフィールドにて、爽やかに発揮するよい機会となったのではないのでしょうか！今回の優勝者は、全国に持ち回りされるヒビノカップに名が刻まれることになります。(M.H)

【勝敗の結果】

優勝：下通ヘッド、準優勝：ガンバ託西、3位：古町おてもやん

デザイン日比野克彦賞：チームSAP、九州新幹線



布絵本のニューフェイス登場!

2009.12.20

当館の布絵本ボランティアさんの手作り布絵本が完成しました。タイトルは「むし」。トンボにバッタ、大人気のカブトムシやクモ、華やかなチョウチョウなど、たくさんのむしたちがキッズサロンを楽しく飾ってくれています。同じタイトル、同じ型紙で作られた布絵本ですが、それぞれに違った温かさがあります。ひとつひとつがとっても愛らしい仕上がりですよ。登場後には、さっそく小さなお友達が遊んでくれました。(C.T)



赤十字こども絵画・ポスター展

2009.12.20

12月19日(土)から2010年1月11日(月・祝)まで、赤十字こども絵画・ポスター展がキッズファクトリーで開催されました。県内の小・中学生、幼児から約1500点もの応募があり、12月20日(日)にはその表彰式がホームギャラリーで行われました。ちょっと緊張気味の受賞者の皆さんがかわいらしい、アットホームな表彰式となりました。(E.Z)



知られざる日赤の歴史展関連イベント

①「ちびっこ献血体験「ハービット献血ルーム」 2009.12.20

②「見つけてみよう元気のしくみ～今日からキミは健康博士～」 2009.12.26

③「いざ、被災地へ!あなたもできる赤十字の国際活動～命をつなごう、熊本から世界へ～」 2009.12.27

④「赤十字ミニコンサート」 2010.1.9

「知られざる日赤の歴史展～すべては熊本から始まった～」会期中の関連イベントとして、血液センター、健康管理センター、熊本赤十字病院、日赤熊本県支部による様々なイベントが開催されました。そのときの様子をまとめてご紹介します。(E.Z)

①「ちびっこ献血体験～ハービット献血ルーム～」が開催されました。献血マスコットのハービットくんの案内で、子どもたちにひと足早く献血の疑似体験をしてもらおうというもの。本当に注射されるのかも…?とちょっと不安げな子どもたちでしたが、献血のしくみを教えてもらって満足そうでした。

②「見つけてみよう元気のしくみ～今日からキミは健康博士～」が開催されました。放射線や顕微鏡を使って体のしくみがわかるコーナーや1日分の野菜の量を測ってみるコーナーなど盛りだくさんの内容で、子どもたちも大喜びでした。

③「いざ、被災地へ!あなたもできる赤十字の国際活動～命をつなごう、熊本から世界へ～」が開催されました。実際に現場で使用される大きなテントや、浄水体験コーナーなど、なかなか見ることのできない被災地での活動の様子を垣間見ることができた貴重な時間になりました。

④赤十字ミュージックボランティア「リーファンサンブルキャラバン」のみなさんによるミニコンサート。童謡からビートルズのメドレーなどをピアノやフルート、バイオリンで演奏していただきました。老若男女を問わず楽しめるプログラムで、新春のひとときを和やかな空気が包んでいました。



CAMK 恒例のピアノボランティアさんによる、「CAMK ピアノコンサート」が開催されました。今回は「クリスマス編」と題して、ピアニストとご来場のみなさんが一緒に「きよしこのよる」「赤鼻のトナカイ」などのクリスマスソングを歌いました。最初は恥ずかしそうにされていましたが、最後には手拍子も飛び出し、外の寒さを吹き飛ばすようなあたたかいコンサートとなりました。

「みんなと歌うクリスマスソング楽しかったです。」

「有名な名曲を弾いてください。聴いたことがある美しい曲を。」

「素晴らしい演奏をありがとうございました。心が温まりました。」(アンケートより)(E.Z)



GIII vol.67 坂口恭平 熊本0円ハウス展

2009.11.7—12.13

ギャラリーIIIでは、熊本市出身で「建築探検家」として活躍する坂口恭平さんの個展を行いました。路上生活者の家をテーマにした研究で知られる、坂口さんの今回の展覧会のテーマは、「熊本で集めた0円の材料で、美術館内に0円ハウスを建設する」というものでした。サンワ工務店の協力を得て、熊本の民家や手取教会で使われていた窓枠、約60枚を使用して、ほぼ3日間で、移動式の0円ハウス《坂口自邸》が完成しました。桜が咲けば公園にお花見に、コインパーキングほどのスペースがあれば、銀座の一等地にだって住むことが可能かもしれない、夢の0円ハウス。会場内はまるで公園のように、不思議とお客様がたたずみ、思い思いの時間を過ごしていたのが印象的でした。(A.S)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

九州ゆかりの日本画家たち展

- 九州の身近な作品に心打たれました。若い方の作品にもエールを送りたいです。活躍を祈ります。(57歳、女性、熊本市内)
- 大変感動しました。堅山南風、高山辰雄が特に印象深かったです。若い画家たちの作品も楽しく拝見しました。(68歳、女性、熊本市)
- 知らない画家の作品が多かったのですが、素晴らしい作品ばかりで楽しむことができました。若い画家の方々は今から注目していきたいと思います。(36歳、男性、熊本市)

知られざる日赤の歴史展&メリー・ゴーラウンド展

- 新発見の作家、作品もじっくりみられてうれしかったです。収蔵作品のセレクションもコンセプト・センスがしっかりしていてすばらしいと感じました。ほとんど一人でじっくり見られて贅沢すぎてありがたいようなもったいないような。日赤展も面白かったです。(48歳、女性、東京都)

「第21回 熊本市民美術展 熊本アートパレード」
応募要項の配布を始めました!

お知らせ

<http://www.camk.or.jp>

テーマ:「まあ、気楽に」

「持ってきていただいた作品はみんな展示します!」というアンデパンダン形式でお送りする「熊本市民美術展 熊本アートパレード」。今回の審査員は、国内外で活躍されている熊本出身の版画家、野田哲也さんです。テーマは「まあ、気楽に」。応募要項も絶賛配布中です(サイズの規定にご注意ください)。たくさんのご応募お待ちしております。

■作品搬入日: 2010年2月20日(土)・21日(日)

■展覧会期: 2010年2月27日(土)~3月14日(日)(M.F)

ARTS BY ARTIST

熊本県で「ARTS BY ARTIST」を開催

熊本いけばな芸術展

2009.10.21—26 鶴屋東館7階ホール
熊本市手取本町6番1号 TEL096-356-2111

第51回熊本いけばな芸術展が鶴屋東館7階ホールで開催。和歌に登場する植物を使って生けるコーナーでは、花器との調和がとれている作品が多く、足を止める人が多かった。流派独自の型で生けてある作品や、花材の線の動きをうまく利用した作品などバリエーション豊かな華展となっていた。(E.Z)



熊大創立60周年 教育学部同窓会創立135年記念書道展

2009.10.27—11.1 熊本県立美術館 分館
熊本市千葉城町2-18 TEL:096-351-8411

美術と書に取組む同窓会展が初めて開催された。書は55人が、漢字、かな、調和体書、等幅広い表現を見せ、大作もあり多彩であった。故、斉藤鶴跡教授は端正な隷書であった。米村聴雨さんは91才で最高齢であり、世阿弥の言葉で「老後初心を忘るべからず」と良寛風に「いろは」で独自の境地を見せていた。森山淡草元教授は「順道」を金文で大書して荀子の言葉をうまく添えていた。平田抱山さんは芭蕉の詩を逞しい線質で強く表現している。徳永崇鶴さんは、淡墨で「遊吟」を素朴な線でその味わいをもしている。三嶋天鴻さんは「創造」と明るいシャープな筆使いで大書していた。岩本竹田さんは、高村光太郎の「少年に与ふ」の言葉より力強い直截な線で淡々ともものしている。大久保倫子さんは、万葉集の歌を潤渇のきいた変化のある線で流れを見せていた。緒方龍生さんは、「拈華悟禅心」をうまい筆さばきで線質の変化をねらっていた。成田和代さんは、正岡子規「春雨」を三行書で流れの変化をたくみな筆さばきで見せていた。(S.K)



独立書人団第13回熊本支部展

2009.11.17—11.23 熊本県立美術館 分館
熊本市千葉城町2-18 TEL:096-351-8411

熊本支部会員31人が約60点の漢字、近代詩文書に大字書等個性あふれる作品を展示した。徳永崇鶴さんは「心無累」を自然体で堂々と書いていた。中村太陽支部長は甲骨文字で「日」を朱墨で「食」を青墨で絵画的に表現していた。河内東壁さんは「桃」をダイナミックにはげしく書いている。三次健一郎さんは、新井満の詞「この街で生まれ、この街で育ち…」を縦2メートル、横4メートルの大作で示した。右山澄子さんの「彩」も印象に残る作品である。前川祐子さんの「漱石の詩二題」は潤渇の妙と線のリズムの変化が見られた。会場は端正な漢字の書道だけではなくそれぞれに個性的な現代書の表現に満ちていた。(S.K)



CHA・NO・YU 金銀・雲母で彩る寄付掛展 一模写の技法とその表現

2009.12.2—12.6 熊本県伝統工芸館・BF和室展示室
熊本市千葉城町3-35 TEL096-324-4930

日本画家大塚浩平さんによる掛軸を中心とした展示。本阿弥光悦や依屋宗達の古跡・古画の模写が並んでいた。タイトルにあるように、金・銀の箔・泥が巧みに用いられ、名画の画品が写し取られている。古画への深い理解があればこそだろう。工夫をこらした雲母の使用も見どころのひとつ。模写が生むクリエイティビティについては、ピカソや若冲などの例がしばしば指摘されている。安易な独創性へ志向ではなく、先人の作品への理解が豊かな可能性を生むことを示す好例のひとつだといえるだろう。(M.F)



林浩 額縁を替えてみる

2009.12.5—12.20 コレクションOMO 熊本市上通町4-14大森ビル3F TEL096-356-4721

美術家の林浩さんの個展。かつての版画作品に、黒檀など素材を変えたオリジナルの額を新たに仕上げる試み。作者の得意とする、石膏板などを用いたギャラリー内でのインスタレーション作品とは異なり、生活空間の中で、木や紙の自然な経年変化を同時に楽しむことができる。表現や思考を下支えする、「ものをつくる」ベーシックな技術の高さが伺える。(A.S)

田尻幸子展 中空の水面

2009.12.23—2010.1.11 ギャラリーMoe 熊本市新市街13-24 TEL096-355-9288

熊本在住の作家、田尻幸子さんのインスタレーションの個展。さまざまな空間や場所からインスピレーションを受けて空間を再構築するように制作する田尻さん。今回は、コンクリート壁のモダンなギャラリーの空間に、スタッフと呼ばれる麻の繊維素材と、座金(ざがね)をつかった、「中空の水面」というタイトルの作品である。ちょうど床から150cmくらいのところに、クモの巣のようにスタッフが張り巡らされ、少しかがめば下を通して隙間から顔を出すこともできる。田尻さんがそっと揺らすと、体が海の中で浮遊するような感覚とオーバーラップする。ごくシンプルな材料と手法で、儂くも永遠の広がりを感じさせる効果に新鮮な驚きを覚えた。今後は、路地や、空間を活かして、迷路のような作品を作りたいと田尻さん。今から新作に出会えるのがとても楽しみである。(M.O)



士野精二個展

2010.1.4-1.11 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町5-6 TEL:096-354-2155

士野精二氏の個展。美術教師を退職後6年間滞在していたというスペイン、トレドの風景や熊本の風景画、植物画など油絵45点が出品されていた。スペイン滞在期間の多くを芸術鑑賞に費やし、当時のクロッキーや資料をもとに帰国後に描いたというそれらの作品からは、爽やかな光差すスペインの空気と、彼の地を懐かしむような暖かさが感じられた。学生時代に感銘を受けたレンブラントなどのヨーロッパ古典絵画の表現を習得すべく、植物や熊本の風景など身近なモチーフを用いて構図や光の表現に挑戦し続けている。年間100枚近くの作品を制作し、「齢70になっても勉強の日々」と話す士野氏の言葉からは、長い時間をかけ真摯に絵画と向き合う高い志を感じることができた。(S.Y)



堤啓一水彩画展

2010.1.5-1.10 ギャラリーカフェト
熊本市上通町5-46 上通りイーストンビル3F TEL:096-352-7156

新春の個展5回目の堤啓一さん。水彩画の展覧会で、作品は江津湖を描いたものが20点ほど並んだ。紫など中間色を効果的につかい、シルエットで見せたり、光の色調の変化を、にじみを活かして描いていた。描かれているのは風景だが、ご本人は、場所とむきあったときのこころの動きを描いていきたいと語り、「今後は具体的なかたちは消えていくかもしれません」と次なる変化を宣言されていた。ターナーの水彩画をおもわせる透明感と空気感に魅力を感じた。(H.T)



アブラムシ展 Aphid show

2010.1.5-1.10 崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10-25 TEL:096-323-1158

崇城大学美術学科洋画コースの4年生を中心に募った学生9名の油彩画展。「油の虫になりなさい」と教えられ、日々制作活動に打ち込んできた学生たちの卒業制作展前の最後の自由展覧の場となる。会場には、不安や喜びなど己の心情を深く追求し、素直に絵筆を走らせた大作をはじめ、それぞれの作者の思う「ムシ」を描いた小作品が並ぶ。大輪の花を4部構成にした組作品や、絵の中の人物が吹き出しに書かれた文字で返事をしてくれるというユニークな表現が目立った。また絵画だけではなく、立体作品も1点含まれており、ジャンルに縛られない自由さが感じられる。さらに、アンケート記入者には手作りおみくじが引けるという嬉しい特典付きで、会場のお客様の笑顔も見られた。個性豊かな9名のこれからの活躍がとても楽しみである。(C.T)



編集後記

今年は、井上展熊本チームの同志である蔵座・橋本と「井上雄彦 最後のマンガ展 重版(大阪版)」会場からはじまりました。懐かしい面々とひさしぶりに顔をあわせ、まさに楽しいお正月♪「お、ここが熊本と違うね!」などというコアなファンをつぶやきを会場に耳にするたび、背後から「ご来館ありがとうございます」とお声掛けしたくなるのを我慢するのが大変でした…。ちなみに昨年は日比野さんのMATCH FLAGから正月が始まりました。今年も、それぞれがそれぞれのかたちで深化・進化していくと思うと、すごくワクワクします。編集長 富澤治子

美術館の年末は、コンサートや、子供向けのイベント、日比野さんのワークショップなど、クリスマスイベントが目白押しで、肝心の当日には、「まだクリスマス終わってなかったの?!」と他のスタッフから声がかかるほどにぎやかに終わりました。そして今年の元旦は天候に恵まれ、熊本では晴れ雪が舞いました。なんだか先行き好調というかんじです。決意新たに精進してまいります。どうぞよろしくおねがいいたします。 担当 大岩みゆき

- 発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.45 2010年2月発行(春号) ◎無料◎
- 発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 担当/大岩 みゆき
- デザイン/(有)松永 社デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷
- 発行/熊本市現代美術館 〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧
*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

- 兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
- 森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
- 本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
- 蔵座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
- 富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
- 坂本顕子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
- 芦田彩英
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
- 矢加部咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 橋本真紀子
Makiko Hashimoto (熊本市現代美術館総務主事)

WORLD NEWS

イタリア生人形調査手記 2009年、夏

財団法人ポーラ美術振興財団の助成を受け、「イタリアおよびバチカン・ミュージアム所蔵の生人形調査」ならびに同時代(19世紀末より20世紀初頭)の日本コレクション調査」というテーマのもと、昨年夏にイタリアのフィレンツェ、バチカン市国において作品調査を行った。ここでは、生人形調査に限定して手記として報告する。

フィレンツェは、当館と長い交流を持つステイベルト博物館にて作品調査を行った。1年ぶりの訪問に、スタッフのみなさんから大歓迎のハグを受け、嬉しさで胸がいっぱいになる。ステイベルト博物館のバリスタは腕がよく、ここのコーヒーも訪問の楽しみのひとつであった。

調査内容としては、2008年、財団法人カメイ社会教育振興財団の助成のもとで行われた調査をさらに発展させ、個別の生人形の内部構造を確認するのが目的であった。(2008年の調査内容は、当館年鑑誌「AG」vol.5、6に発表。)

今回の調査としては、前回の調査を受け、その全身の構造が最も精巧に出来ている1体の生人形の内部構造を明らかにした。

ステイベルト博物館のコレクションのほとんどを形成したフレデリック・ステイベルト本人が保管していた領収書によると、彼は日本より生人形の頭部だけを購入した記録が残っている。今回調査した作品も、頭部は日本製、身体はフィレンツェ製というハイブリッド型である。

体はすべて木製でその主たる肢体には球体関節の構造をとっており、あらゆるポーズが可能である。指関節すべて自在に曲がるようになっており、手

にもやわらかな表情が出せるようになっている。さすがピノキオ発祥の地イタリアならではの、等身大マリオネットさながらという身体構造であった。鎧を着せての自立に見合う頑丈な構造ともいえる。

また同様に、ステイベルトの領収書には、日本製の布を購入した記録が多々ある。これまでそれがどのようなタイプの布を指すのかがあいまいであったが、今回調査した生人形の、甲冑の下に肌着は、くるみボタンまでついたスタンドネックのシャツ仕立てのものであり、ステイベルト本人が、ほとんどの素材やパーツは日本から取り寄せ、加工や修復はフィレンツェで行うとした方針がはっきりと浮かび上がってきた。

等身大マリオネットさながらというボディは、日本部門の生人形にかぎらず、中世ヨーロッパ部門にもみられる。自在なポージングによる生き生きとした身体表現へのこだわりが共通した意識であることが理解できた。

さて、続いてさらに南下して灼熱のローマである。バチカン・ミュージアムの民俗学部門博物館の生人形調査が目的だった。日本部門はまだ未公開であり、公開に向けてゆっくりと準備がすすめられている。

今回の調査は、ステイベルト博物館の日本部門研究学芸員フランチェスコ・チヴィタさんの紹介で昨年ごあいさつに訪問してより1年ぶりの再会に、スタッフの方々も大歓迎してくれた。

バチカン・ミュージアム所蔵の生人形は、その来

歴もはっきりしており、1925年にバチカン市国が万博を開催した際に、世界各国から集められた品々と一緒に、返却されずにそのまま所蔵されていたものである。万博の日本の出品作品は、リストによると、現在国宝に指定されている支倉常長肖像画や、そのローマ市公民権証書などもあり、日本側としてもかなり協力的に参加した様子を感じさせる。

当時出品された生人形は5体。現在残るのは、既婚女性1体、未婚女性1体、少年1体、少女1体である。既婚女性はかすりに昼夜帯の普段着、未婚女性は第一礼服の振袖に袋帯、少年は学童の姿で、少女は七五三の姿である。少女にかぎり、大型の市松人形が転用されていた。年齢に応じた衣装の紹介という点のほうが重要というわけである。すべての生人形のボディは新聞紙や紙を固めて成形したもので、軽量化が図られているのと同様に長期展示に耐える構造でつくられている。すでに85年の月日を経ているものの、バランスに揺らぎはなくコンディションも良好であった。すべての生人形は肌着までも完璧に身につけており、現在の和装ではみられない当時の装いの流行も垣間見えた。他に、万博後に収蔵された初老の禅僧の生人形も1体所蔵されている。

今回は非常に実りの多い調査となったが、このような生人形調査は、将来的に研究成果として行われる第3弾の生人形展開催をめざして、今後も継続的に行っていく予定である。(H.T)



夜のフィレンツェ、
パラッツォ・ヴェッキオ



ステイベルト博物館で調査中



生人形の手のアップ



ステイベルト博物館のヨーロッパ
ゾーンの鑑賞用のマネキン



ローマ、コロッセオ



バチカン市国 聖ペトロ大聖堂



バチカン・ミュージアムにて
生人形調査中



少年の生人形